

3-1 有名人の裏の顔

■ 内容理解のヒント ■

著名人と知り合いであることを自慢げに吹聴する人を見かけますが...

■ 構造・読解のポイント ■

1. 第①文で、the passion と many people have to ...は文法的にどうつながっているのでしょうか。
2. 第⑤文の下線部 this public performance of theirs とはどういうことなのでしょう。

① I have always wondered at the passion many people have to meet the celebrated. ② The prestige you acquire by being able to tell your friends that you know famous men proves only that you are yourself of small account. ③ The celebrated develop a technique to deal with the persons they come across. ④ They show the world a mask, often an impressive one, but take care to conceal their real selves. ⑤ They play the part that is expected from them and with practice learn to play it very well, but you are stupid if you think that this public performance of theirs corresponds with the man within.

[W. S. Maugham: *The Summing Up*]

【語注】 ① wonder at ~に驚く passion 情熱 meet ~と知り合いになる the celebrated 有名人 ② prestige 威信、信望 acquire ~を獲得する prove ~を証明する of ~ account ~の重要性を持つ ③ develop (性質・嗜好など)を持つようになる、身につける technique 技術 deal with ~を扱う come across ~に遭遇する ④ impressive 印象的な take care to do ~するよう気をつける conceal ~を隠す ⑤ part 役割 expect A from B AをBに期待する stupid 愚かな correspond with ~と一致する within 内部で、心の中で

■ 味読のポイント ■

「有名人と知り合いである」こと自体はどうでもいいのですが、そのことに優越感を持っているとしたら、それはお門違いで、それだけ自分が「小物」だということになってしまうのに気付いていないということになります。本当の「大物」は、「誰それと知り合いだ」などと口にすることはないでしょう。

■ 構文研究 ■

- ① I have always wondered at the passion [ϕ (that) many people **have to meet the celebrated**].

「私がかねがね驚いてきたのは、有名人と知り合いになりたくてたまらないという、多くの人が抱いている強い気持ちである」

この部分は構造面での誤解が起きやすい部分と言えます。have toの連続から、つい「～しなければならない」という意味だと思いがちですが、the passion という「名詞」の後ろに、many people have ...という「主語+動詞」が続いていることから、名詞の後ろには関係代名詞を補うことができます。

ただし、その場合には、先行詞となる名詞は、もともとは後ろに続く他動詞または前置詞の目的語となっていたものが前に移動したものです。

名詞 (=先行詞) ϕ (関係代名詞 [省略]) + 主語 + 動詞 ●

↑

この文で、先行詞 the passion の元々の位置がどこかを考えてみると、他動詞 meet の後ろには the celebrated 「有名人」という meet の目的語が来ていますので、結局 have の目的語の位置しか考えられません。

つまり、ここでの have to は、名詞が前に移動したためにそう見えるだけで、「...ねばならない」という意味ではないことになります。(p.81)

S (主語) + have + 名詞 (O) + to do ...の「名詞」が前に移動

⇒ 名詞 + ϕ + S have ● to do ...

なお、この meet は「出会う」ではなく、「知り合いになる」という意味です。Nice to meet you. が「初めまして」の意味になるのも、この meet の意味から来ています。有名人に出会うだけなら、サイン会やイベント、またいわゆる「出待ち」や「入り待ち」でもできますが、ここでいう「知り合う」は、ここではお互い

の名前や住所、連絡先もすべてわかるくらいの意味です。

- ② The prestige [ϕ (*that*) you acquire by being able to tell your friends that you know famous men] proves only that you are { yourself } of small account.

「自分が有名人と知りあいであると友人に言えることで手にする威信とは、自分自身が取るに足らない人間であるということをただ証明するに過ぎない」

第①文同様、the prestige の後ろには関係代名詞を補うことができます。famous men は第①文 the celebrated の言い換えです。また know も第①文の meet 同様、単純に名前を知っている以上の知り合いであるという意味です。(そもそも「有名人」ですから、ほとんどの人は名前を知っています。ここではもっと深い交友関係があることを意味することがわかります)

この文は、第①文の「有名人と知り合いたいという多くの人々が抱えている気持ちが筆者には理解できない」理由を述べています。「有名人と知り合いである」ということは「自分が小物である」と言っているようなものだという事です。

なお、yourself は強調用法で、of small account は are の補語になっています。

- ③ The celebrated develop a technique to deal with the persons [ϕ (*whom*) they come across].

「有名人は自分が出会う人間をあしらう技術を身につけている」

ここから有名人の実態についての話が展開されていきます。第②文の famous people がここでまた the celebrated に言い換えられています。

a technique to *do* で「～する技術」となります。

- ④ They (= the celebrated) show the world a mask, often an impressive one (= mask), but take care to conceal their real selves.

「彼らが世間に見せるのは仮の姿であり、しかもそれは印象的なものであることが多い。しかし彼らは自分の本当の姿を隠すように気を配っている」

第③文の technique がどういうことかを述べています。さらに次の第⑤文で、a mask 「仮の姿」を具体的に説明する展開にもなっています。a mask と an impressive one は同格(言い換え)の関係になっています。

- ⑤ They (= the celebrated) play the part [that is expected from them] and { with practice } learn to play it (= the part) very well, but you are stupid if you think that **this public performance of theirs** corresponds with the man within.

「彼らは自分に期待される役を演じ、訓練の結果、その役を見事に演じるようになるのである。しかし、こうした人前で演じる姿とその人の内面が同じであると思うのは愚かである」

第④文の mask をここでは part 「役割」と言い換えています。this public performance of theirs とは、その言い換えで、「人前で演じる、自分に期待されている役割」のことです。いわゆる「キャラ」と考えてもいいかもしれません。例えば、「いい人キャラ」で売っている芸能人の中には、ファンの前ではそのイメージ通りのキャラを演じますが、裏では全く別人で、スタッフを怒鳴ったり、横暴なふるまいをしたりする恐ろしい人であるというような話をよく耳にします。(真偽は不明ですが)(なお、この this public performance of theirs は a friend of mine と同じパターンの表現です)

the man within の within は通常、前置詞として用いられ、目的語(名詞)をとりますが、ここではそれがありません。一般に前置詞が目的語を伴わない場合は副詞となり、within の場合は「内部にある」という意味で後ろから the man を修飾し、「内部にある人間→人間の内面」を意味します。「副詞は名詞を修飾できないのでは?」と思われるかもしれませんが、there や here など「場所」を示す副詞は後ろから名詞を修飾することがあります([例] the book there 「そこにある本」)。なお、The Man Within はイギリスの小説家グレアム・グリーン(Graham Greene)の著作にあり、『内なる私』という邦題が付けられています。

■ 文意 ■

①私がかねがね驚いてきたのは、多くの人々が持っている、有名人と知り合いになりたくてたまらないという強い気持ちである。②自分が有名人と知りあいであると友人に言えることで手にする威信とは、自分自身が取るに足らない人間であるということをただ証明するに過ぎない。③有名人は自分が出会う人間をあしらう技術を身につけている。④彼らが世間に見せるのは仮の姿であり、しかもそれは印象的なものであることが多いが、しかし自分の本当の姿を隠すように気を配っている。⑤彼らは自分に期待される役を演じ、訓練の結果、その役を見事に演じるようになるのである。しかし、こうした人前で演じる姿とその人の内面が同じであると思うのは愚かである。